十日十銘

小泉信三

十日十話

小泉信三

毎日新聞社版

昭和三十七年二月十六日　初版発行

十日十話

定価三九〇円

著者　小泉信三

発行者　高木金之助

印刷所　図書印刷株式会社

製本所　渡辺製本所

著者との申合わせにより検印を省略

発行所　毎日新聞社

東京都千代田区有楽町一ノ一一
大阪市北区堂島上二ノ三六
門司市清滝町一ノ九〇二
名古屋市中村区堀内町四ノ一

© 1962, Shinzo Koizumi　Printed in Japan

十日十話

目次

十日十話

前がき　三
一、愛国心　四
二、忠　誠　八
三、歴　史　一三
四、民族と階級　一六
五、道徳教育と耳と目　二〇
六、音　楽　二四
七、旅　行　三〇
八、スポーツ　三四
九、老健のいろいろ　三八
一〇、四季、朝夕　四二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

随従私記

出発　四九
ホノルル　五一
サンフランシスコ　五六
ロスアンジェルス　五九
ワシントン　六二
ニューヨーク　六九
シカゴ　七五
シアトル――ポートランド　七七
帰国　八〇

時事

気がねなき評論　八五
新聞論調の傾斜　八九
迂回生産と教育　九一
寛容と規律　九五
抵抗の精神　九九
時の力　一〇三
中立論いろは　一〇八
平地に波瀾　一一
ソ連の新綱領と共産党宣言　一一六
ソ連共産党大会　一二四
ベルリンの記憶　一二八

正しい国語の軽視と重視　一三一
気ままへの阿ねり　一四一

人物

三淵忠彦氏　一五一
アドミラル・ノムラ　一五八
小林一三さんの憶い出　一六一
和辻哲郎君の講義　一六七
軽井沢の友　一七〇
幸福なる賢こき父　一七六
山崎健之丞　一七九

身辺

近親のこと　一八三
「新文明」と私　一八七
紙と私　一九五
私と英語　一九七
文化の日　二〇一
内地旅行　二〇三

書籍

帯剣歌人その他　二二五
『私本太平記』を読む　二二六
至尊の苦悩　二三一

孔子は如何なる人か　二三七
国民同胞感　二四一
句集『あさがほ』　二四五
マイ・フェア・レディー　二五三
あとがき　二五九

十日十話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

前がき

毎日新聞編集局から十回ばかり何か続けて書かないかとすすめられ、引き受けたら、まず「十日十話」という題名が心に浮かんだ。福沢諭吉に『福翁百話』があり、夏目漱石に『夢十夜』があるから、この題は遠慮すべきかとも思ったが、結局そのままにした。私のことであるから堅苦しい話が多くなりそうだが、自分なりに少しくだけた話もしたいと、思ってはいるのである。

一、愛国心

愛国心は無理に造り出すべきものではない。また、造り出し得るものでもない。ただ区々たる小智と小感情にわずらわされて国民真情の流露と高揚を妨げるもののあった場合、それを指摘して排除することは、怠ってはなるまい。

「獨立の氣力なきものは國を思ふこと深切ならず」

これは福沢諭吉の言葉である。同じ福沢の「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずといへり」といった、あの『學問のすゝめ』の書き出しの一句は、今日ひろく世に知られ、たびたびの機会に引用されているが、同じ『學問のすゝめ』に、その同じ福沢が「獨立の氣力なきものは」云々と説いたことは、あまり世間に知られていないように見える。私は「天は人の上に」云々の句とその精神を重んずることにおいて人におくれぬことを期するものであるが「獨立の氣力」云々の句が意外にひろく知られていないことを遺憾とし、今後もそれをくり返して説きたいと思う。福沢の意は、国民の卑屈を戒めるにあった。卑屈の民は真の愛国者たり得ない、というのであった。福沢のこの言葉は明治六年、すなわち今から九十年前のものであるが、今日の日本において少しも古くなっていない。

われわれが国を思う心、われわれが祖先と自分と子孫とがそこに生まれて、そうしてそこに死ぬべきこの国土と、そこに住む同胞と、その歴史や伝統や習俗に対する愛着は、人間感情の最も純粋なるものに属し、人は極めて自然にこれを抱くのである。この愛国心が狭隘な、排他的のものとなって、万一にも世界と人類の幸福に逆行することは、極力戒めなければならぬところであって、高い理性によって、これを純化する必要は、私たちのしばしも忘れてはならぬところであるが、しかし、日本の利害と栄辱とを、他国民のそれと全く同一視して変わりがないということは、己れを偽ることなしにはいい得ない。これが多くの人にとっての真実であると思う。

義ヲ見テセザルハ勇ナキナリ。

博ク愛スルコレヲ仁トイフ。

これらの言葉はもとより国籍を超えて真実である。けれどもたとえば、暴風雨の海上で絶大の危険を冒して難破船を救助するというごとき壮烈義勇の行為が行なわれたとして、それが日本人によってなされたときくとき、私たちは、それがいずれかの他国人によってなされたときよりも、たしかにうれしく思う。

また、人間の生命を救い、あるいはひろく人類の福祉を高め得るような科学上の大発見が成功したとして、それが日本の学者によって行なわれても、他国人によって行なわれても、別段われわれの喜びは変わらないか。私たちはそうは思わない。いわんや自国の領土が不当に他国によって侵略された場合をや。この場合も、世界のいずれかの国土が、いずれかの他国によって侵略された場合も、われ

われのそれを苦痛とする程度に変わりはないというものが、もしあれば、私たちはその人の正直を疑う権利を保留する、といわせてもらわなければならぬ。

一国民が自国の利害と栄辱とを思う心は、このように真実自然であるにかかわらず、一種の世間体をはばかってこれを直言せず、あるいは小智にわずらわされて右顧左眄するものがあることは、今日の日本では残念ながら事実である。同じ福沢はかつてその「婦人論」中に旧式の男子の中、世間の思惑をはばかってわざと己れの妻を顧みず、あるいはこれをうとんずるもののあることをあざけって表面を装う如きは「勇氣なき痴漢といふべし」とのしったことがある。国を思う心の表白に関して「勇氣なき痴漢」の評語はもはや無用となったといえるか否か。私はいまだ楽観することは出来ぬといいたい。

今日の日本において、たとえば国旗の掲揚にしりごみし、あるいは国歌の斉唱に際してあえて姿勢を正すことをせぬものについて、その理由とするところを問えば、何か一かど、もっともらしいことをいうかも知れぬが、さらに一歩を進めてその心事の底をたたけば、要するに何かを憚り、何かに阿るというのが、その真相である場合が意外に多いのではないか。「獨立の氣力なきものは國を思ふこと深切ならず」。福沢の言葉が、今日の日本において少しも新鮮を失わぬと、私がいうのはそれである。

私はこのごろ日本の新聞雑誌その他における言論に、進歩主義への気がねともいうべきものが多いことをいくたびか指摘した。進歩的思想を抱くものが進歩的に言論することは当然であって、何の遠慮もいらないが、進歩主義への気がねから進歩的に言論し、その言論を読んだものがさらにまた気が

ねを重ねた言論を再生産することは自他をあやまる所以であろう。この種の言論の拡大再生産行程は遠慮なくどこかでこれを断ち切ることが望ましい。愛国心の問題についても私はそれを感ずるといいたい。

自ら軽んじて人これを侮る。国を重からしめることを願うものは、先ず自国の栄辱を知らなければならぬ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com